

学生時代の自覚的渉猟

群像

1922年 5月号

廣松渉

本代会

「本に会う」率が高いのは何といつても学生時代のことであらう。私は一九五二年に大学に入學して以後、退學して再受験したり、休學したり、留年したり、そのうえ、大学院も博士課程まで在籍したので、十余年に及ぶ長い学生生活を送った。にもかかわらず、その間に、本との出会いは数えるぐらいしかなかった。

マルクスやヘーゲルにはそれ以前に出会っていたという事情を割引いても、どうやら運が悪かったらしい。

読書量はそう少ない方ではなかったつもりである。毎日七百頁をノルマにしていた。一九五五年に「六全協」で復讐して以後、活動に忙殺されていた時期でも、月単位に均らせば、ノルマを大幅に割込むことはなかった。コアの部分は計画的に読書を進め、同時に、多岐な乱読にも心掛

に長期休暇がある。必ず一回は精読した。だから、三年間に九回ずつ読んだことになる。尤も、原書で読んだのは本郷進學前の春休み一回である。告白すれば、それも事実上は『純粋理性批判』の途中までで、あとは訳書を読み返したに等しい。――駒場時代に何とか辿れたのは、一九世紀前半の大哲学者までであった。

当時は、マルクス主義と並んで、実存主義が流行していたが、私が雑読書の一部として割合いと真面目に読んだのは、ハイデッガーの『存在と時間』およびサルトルの『存在と無』のそれぞれ邦訳書第一分冊ぐらいだった。これら二人の著作は大学院時代までに熟読する機会も得たが、ヤスパースやマルセルは肌合わなすぎた。――マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの主要著作は一通り読み了っていたつもりだったせいかわ、学生時代には殆んど読み直さなかった。但し、マルクスの『経手稿』と『経済学批判要綱』は以前には接する機会がなかったので新規に読んだ。ルフェーブル、コンフォース、ガロディ、フォガラシといったヨーロッパのマルクス主義哲学者の文献や、毛沢東の『矛盾論』『実践論』は読んでみた。

駒場時代に出会ったと言えるのは、デュルケームの『社会学的方法の規準』とレヴィ・ブリエールの『未開人の思惟』である。授業はサボりっぱなしだったが、偶々出席し

けていた。それでいて、出合いは滅多になかった。

哲学専攻を決意して以降は、西洋哲学の古典は全部読破しなければならぬという、強迫観念に駆られていた。といつても、古代哲学は、鬱陶しい受験勉強からの逃避に（？）岡田正三訳の『プラトン全集』やアリストテレスの『形而上学』（岩崎勉訳）、『アテナイ人の国家』（原隆園訳）などを読み留った程度だったし、中世哲学ははじめから敬遠した。

駒場では、近代哲学の大所をほぼ時代順に読んだ。研究書は必要に応じて併読したが、概説書の大いには殆んど手にしなかった。古典は一度さっと読み通したうえで、二度目に精読することにしていった。――但し、カントの三批判書だけは、春・夏・秋の休みに（駒場では今でも読書の秋）た黒川純一先生の社会学の講義および淡野安太郎先生の社会思想史の講義でそれぞれ紹介があったのを機縁に讀み始めたのだ。物象化という現象を強烈に印象づけられたのはデュルケームを介してである。また、思考様式や自然観の歴史的・文化的相対性がかくも甚しいことを思い知らされたのはレヴィ・ブリエールによってであった。――授業が機縁ということでは、ウバニシャッドや仏教哲学への関心もそうである。川田熊太郎先生の哲学概論の一齣で興味をそそられなかったら、本郷で印度哲学を受講するような真似はしなかったことだろう。

本郷に進學して、一九世紀後半から二〇世紀にかけての哲学を読む段になった。入學当時はヘーゲルで卒論を書く予定だったが、本郷に進學した時点ではマッハで書くつもりになっていた。主任教授の桂寿一先生から、「マッハを選ぶのなら、対極的な論理主義の立場の哲学、つまり、新カント学派や現象学派を同じ比重で勉強する必要がある」と諭された。言付けを守ったというわけでもないのだが、どのみち前世紀後半から今世紀にかけての哲学を勉強する段取りにしていたので、桂先生の忠告に随う形になった。

ところが、マッハはもとより現象学派関係の著作は、當時はまだ邦訳が殆んどなかった。フッサールのものは、『イデー』と『論研』第一巻の訳はあっても、肝心の

『論研』第二巻の訳書はまだなかった。新カント派のものは、ヴィンデルバントとコーヘン、それにラスクは訳書がほぼ揃っていたにしても、リッケルトでさえ、『哲学体系』の訳がない始末だった。新カント派出で現象学とも接点を持ちながら独自の体系を築いたニコライ・ハルトマンやカッシーラーのものも、ハルトマンは抄訳まで含めればかなり訳されていたが、カッシーラーは『認識問題』も『実体概念と閏数概念』も邦訳がなく、『象徴形式の哲学』も抄訳しかなかった。

歴大な著作群を原書で読むには私の語学力は貧弱にすぎた。そこで紅露外語に通って語学力を鍛えると同時に、研究室から借出したり図書館に詰めたりしながら、悪戦苦闘したのだった。——当時は洋書の輸入が制限されていて原書を購入するのは困難であった。貧乏書生にはどのみち高価な洋書には手出しできなかったのだが、それでも古本屋街はよく歩いた。今とは違って、神田神保町界隈は古書店が軒を並べていたし、青山にも古書店が何軒もあった。中央線沿線が穴場で、高円寺、荻窪、吉祥寺へと足を伸ばした。和書も哲学書の新刊は少なかったため、戦前に刊行されたものを古本屋で買い漁ったものである。——ともかく、強迫観念に駆られてノルマをこなしていった。

出会ったと言えるのは、哲学書ではフッサールの『論

れた波多野完治先生の講義が機縁で、ピアジェに限らず、発達心理学にも、異常な、関心を抱くようになった。

言語学の服部四郎教授と国語学の時枝誠記教授とが論争中だったので、両方の講義を聴いて刺激を受けた。——スターリン晩年の『マルクス主義と言語学の諸問題』が発表され、三浦つとむ氏の批判が出たりした頃から、言語学には興味があったし、時枝教授に独創的な「言語過程説」があることぐらいは知っていた。——ソシュール解釈が一つの焦点であり、折しもゴデルの手稿復元版が公刊され、バイイ達の編になる『一般言語学講義』を鵜呑みにしてはいけないと知らされていたので、ゴデルの版と読み較べたりもした。言語学関係の有名な本で邦訳のあるものは片端から読み、当時はまだ訳書のなかったブルームフィールド、サビア、ビューラーなども読んだ。最大の出会いはビューラーの『言語理論』であった。

哲学の講義では、山本信先生が真理論の特殊講義で言及されたユクスキールの『シュトライフツューゲ』（邦訳『生物から見た世界』の原本）を読んで一大衝撃を受けた。また、桂寿一先生の演習でデカルト『方法叙説』へのジルソンの『注釈』に接して、コメントールとはかくあるべきものかと思った。（コーヘン、ファイヒンゲール、ペイトン、スミスなどの『純粹理性批判注釈』からはショックは受け

研』第二巻とマイノングの『対象論』や『仮定論』である。『論研』第二巻は、大事そうなことが書いてあるのに一向に頭に入らないので、自家用訳を作りながら読んだ。経験論的・心理主義的な傾向にあった私にとって、頂門の一針であった。フッサールの本質直観説やイデアールな存立論を最終的に認めるわけにはいかないが、この錯誤の契機を勘案することなくしては意識現象の記述的分析は不可能であることを覚った。ブレンターノ門下でフッサールの先輩にあたるマイノングの対象論や仮定論は、私の判断論にとって、間接的には「事的世界観」にとって、決定的な踏石になった。カッシーラーが『象徴形式の哲学』で陳べている「知覚の象徴的懐胎」説や「表情的知覚」論も、私にとって出会いだっただけと言えよう。

本郷でも授業が直接間接に機縁となって本に出会った例もある。

心理学の講義では、駒場でも本郷でもゲシュタルト心理学が中心で、入学以前に高橋穰『心理学』などで得ていた知覚観を一変させられた。メッツガーの『視覚の理論』を読んだのは後年のことだが、慌ててコフカのものを読んでの憶えている。——ケーラーの『チンパンジーの知覚実験』には雑読で既に出会っていた。尚、これは大学院時代になってからだが、教育学部に非常勤で出講しておら

なかった)。私が『ドイツ・イデオロギー』のコメントールを書けないのはジルソンのせいである。——大森莊蔵先生の講義を介してヴァイトゲンシュタインに出会ってもよきそうな筈だったが、どうしたわけか「トラクタートゥス」も『哲学探求』も学生時代には読まなかった。省みて残念でならない。

雑読で出会ったものに、ゲルプとゴルトシュタインの『脳損傷者の心理分析』やブロンデルの『未開人の世界・精神病者の世界』（編訳書）などがあった。——ヤスパースの『精神病理学総論』には全く歯が立たなかったし、ヴェントの『民族心理学』は余りにも膨大なのに呆れて、初め二巻を拾い読みしただけだった。

大学院時代には、岩崎武雄先生の演習で初期現象学派のマックス・シェーラー（後年は知識社会学者として有名）の『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』に出会い、また、経済学部に出講しておられた中野正先生の演習でローベルト・ハイソの『弁証法の本質と諸形態』に出会った。——倫理学科の金子武蔵先生が演習のテキストに使われたのが機縁で『ドイツ・イデオロギー』のテキスト・クリティックをおこない、また、院生の身分でマッハの名著『感覚の分析』を訳刊したが、これらは出会いではなく「再会」と言っべきかと思う。